

## ICEモデルを通した内部質保証の試み —ICEモデルでつなぐマイクロ・メゾ・マクロ—

東日本国際大学  
AP推進室

以下は、2019年12月22日のテーマV最終報告シンポジウムでの内容を簡略化・再編集したものである。

### 1 ICEモデルとは

- ・ 授業の到達目標を、I (Ideas) [要素概念、要素的操作を] つかむ、C (Connections) [それらを] つなぐ、E (Extensions) [それらを、授業で学んでいないような状況で] つかうの三つの相に分類して、目標の深まりの方向を示す。
  - ▶ 例 (I-つかむ) 思いついたものをそのまま列挙する、(C-つなぐ) それらの要素の間の関連を明確にし、構造化した分類表を作成する、(E-つかう) 構造化したものを、その妥当性を検討しつつ、現実の状況に適用する。
- ・ カナダのクィーンズ大学を中心に開発と活用が進み、現地では授業設計、運用とカリキュラム設計の両方で使われている。現在は広島を発信地として、中等教育でも活用が進んでいる。

### 2 DPに表現された能力等の獲得の状況をどのように測るか

- ・ 本学では、DPに表現された能力等を、各授業において直接測定し、それを集積するという方向を選択した。
- ・ しかし測定するためには、何を測定するかを明確にする必要がある(シラバスに増えてしまう「～を理解する」という表現のあいまいさ)。そのための手段としてICEモデルを利用。

### 3 多様なステークホルダーとの共有のツール

- ・ 1年生の授業でも、実際には、高度なことを暗に求めている場合がある。それらを明示化するための一つのツール。それにより、学生と目標の深まりを共有するために使用する(単に記憶を求めているのではない、ということを確認にする)。
- ・ また、ICEモデルを利用して分解した表現を用いて、多様なステークホルダーと、育てるべき能力を明確化していく(就職先調査では、それにより、67%の回答を得ることができた)。

### 4 現行の教育プログラムの無意識を可視化する

- ・ ICEモデルを利用して、実際の評価も含めて——ただし過剰な負担にならないかたちで——授業への埋め込みを試みたのは、マクロ(メゾ)からマイクロへという順番で進めると、実際の授業の現場で何が起きているかを捉え損ねる危険があると考えられたから。
  - ▶ すでに走っている教育プログラムをゼロから組みなおすのは難しい。
  - ▶ プログラムとして、公的に何を実施しているか、と、授業の実際の乖離が広がるのは、質保証として、かえってステップが増えることにならないか。
- ・ もちろん、一方でカリキュラムマップ等による教育プログラムの構成は必要である。他方で、各授業で実際に何が起きているか、各教員が何を目標とし、授業を行っているかを測定するための、可視化のためのてがかりの埋め込みとして、ICEモデルはうまく機能していると考えている(ポスター発表の展示も参照されたい)。
  - ▶ 各教員が実際に実施している内容の総体が有している、潜在するカリキュラムの現状(各学年の学生に各教員が何を期待しているか)が可視化できた。
  - ▶ その結果は、各種調査で学生の能力を伸ばす余地と必要があることが示されている課題発見力・解決力について、カリキュラム上の穴があることを示しており、この手法の有効性が示されている。